
私と年下王子さま

橘 亜衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と年下王子さま

【Nコード】

N6916Z

【作者名】

橘 亜衣

【あらすじ】

異世界出身の、香山絵里（21）。そんな彼女に突然結婚話が持ち上がった。ただとお相手はなんと、14歳の王子様！王族、とか、王子様、とか、結婚とか以前に、14歳！？ってことは、中学生！？7歳も年下の旦那様だなんて、絶対に無理！！かといって断ることもできず、彼女は王子のもとに嫁ぐことになりました…。

00 親愛なるお兄様へ

『拝啓、日本のお兄様。』

私があなたの元を去って2年経ちますが、元気にやっていますか？
私はそれなりに元気にやっています。

2年前のあの日、大学の講義中にうたた寝をして、気付いたら異世界に飛ばされてた時はどうしようかと思ったし、これは夢だと必死に現実逃避もしました。

だけどそれは現実で。

知らない世界で生きる術のない私は途中、人攫いにあったり知らないおじさんに売られそうになったりしたけど、今は心優しい人達に拾われて、幸せに暮らしています。

拾ってくれたのはとある国の貴族の方で、子供がいなかった2人は私を実の娘のように可愛がってくれています。

幼いころに両親を亡くした私にとって、2人は間違いなく私の父親と母親という存在です。

いつかお兄様にも会ってほしいと思うけど、やっぱり住む世界が違うから無理ですね。

文字通り、世界、違うから。

そんな両親同然の2人のお願いに、私がどうして断れるでしょう。

実はこの世界、それなりの地位のある人は、20歳までにしかるべき相手に嫁がなければならぬという決まり事、のようなものがある。って。

如何せん、私の家はこの国でも有数の大貴族。

いくら私が養子で、実は異世界出身だといっても、結婚はしないと決めたんです。

異世界生まれはともかく。もう20歳過ぎてるんですけど、いいんですか？

なんて聞いたら、あなたは幼く見えるから大丈夫。と笑顔で言われました。

確かに、日本で大学生やってた頃から中学生に間違われるほどの童顔幼児体型だったけど。そしてそれから2年経った今とその頃と、大して変わっていないけれど。

…喜んでいいのか、正直微妙なところです。

どうやら私、17歳で通っているらしく、相手方にもそれで話をしているから、と言われました。

うん、まあいいんですけど。

考えようによったら、若く見られるのは女性として喜ばしいこと。ここは素直に喜んでおこうと思います。

それで、問題は嫁ぎ先、なんです。

大貴族ということは、お相手はもちろんそれに見合った家柄ということ。

聞いてみたら、なんとこの国の王族でした。

はい、もちろん現国王様ではございません。

国王は御年57、もちろん妻である王妃様もご健在です。王様は王妃様一筋なので、愛人や側室を作られたり…なんてことは致しません。

ではなくて。

お相手はその国王様の3番目の息子、アレク王子様です。

王子様と結婚…生まれも育ちもここに来るまでは平民だった私が、まるでシンデレラ…いいえ、彼女も実は裕福な家の生まれなので、ちょっと違います。

とにかく、相手が王子様というのも十分驚愕の事実ですが、実は問題はそこでもありません。

実は王子様、現在14歳。

ええ、14歳です。

そして私の本当の年は、21歳。

つまり、21歳の私が、あろうことか14歳の王子様に嫁ぐことに

な
っ
た
の
で
す。

01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。(前書き)

すみません、少し変更しました!!

01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。

この世界での両親から、衝撃の事実を告げられてから一週間。

私は今、お城へと向かう馬車の中にいた。

えーと…、もう一回言っておこう。

結婚の話を告げられてから1週間。

なのに、既に私は今日から、王子様のお嫁さんとして、お城に入ります。

…なんか、早くない？

だって普通は、こう、準備とか、色々あるものでしょ？

嫁入り道具のセットの準備とか、心の準備とかその他もろもろ。

それともこの期間の短さは、この世界では普通なの？

と聞くと、いや、早いと真顔で母様に言われた。

いいんですけどね、どうせ何週間経ったところで、腹はくくれないだろうし。

それに私の嫁入りセットは、おいおい家から送られてくるそうだし。

そんな訳で、実質この身一つで王子様の元へ向かっているんだけど。

私、ある重大な事に気が付きました。

なんで今！？って自分でツッコミ入れてしまっただ、初歩的な事実。けれど、それを聞かぬまま王子にお会いできない。

「あの、リースン、つかぬことを伺いますが」

すると、私の前に座っている、銀髪ツインテール美少女が「何でしようか」と言った。

彼女は私についている侍女で、結婚しても一生お仕えします、ということなので、こうして彼女を連れて行くことになった。

性格はすごく面倒見が良くて、口ではなんだかんだ言いながらも優しい少女。

ただどさずがの彼女も、私のこの質問には呆れるんじゃないか…。

心に不安がよぎる。でも…って、ああもう、考えてる場合じゃないぞ、私！

私は勇気を振り絞ると、リースンにとある質問をした。

「私の嫁ぐ、第3王子アレク様って……誰ですか？」

その時確かに、時は止まりました。

リースンが驚愕のあまり、大きな目を更に大きく見開いて。口は心なしに半開きで、まるで息がとまったかのよう。

うわあ、美人はどんな顔でも美人だなあなんて見惚れていると、はっと我に返ったのか。

きつと厳しい顔になると、私を険しい目で睨んだ。

「エリ様。今日は一体どういう日かご存知ですか？」

美人の怒りの迫力に。私はびくりと体をすくませた。

「う、はい。王子様との結婚式の日です」

私が身に纏っているのは、繊細な刺繍が施された白のドレス。
いわゆるウェディングドレスだ。

首元には、何カラットあるんだろう……って思うほどの大きなダイヤ
が付いた首飾り。

肩まであった髪の毛は結われ、頭の上にはキラキラひかるティアラ。

どこからどう見ても、花嫁さんスタイル。

「では、今はどういう状況がお分かりになりますか？」

「…今は、お城へと向かう真っ最中です」

するとリースンが、はああああ、っと、ものすごく呆れたように長
いため息をついた。

「それで、アレク王子をご存じないとは、どういう意味なのですか？」

「えっと、だってこの国には、第1王子と第2王子、それに第1王
女様しかいないはずですよ？なのに第3王子って、一体誰のこと
なんだろう……って思いまして……」

14歳って、元の世界でいえば、中学生じゃない！？反抗期真っ盛りの、学ラン着ているような。

どうしよう、そんな人と結婚するなんて、しかも7歳も年下だし、犯罪だよね！？

間違いなくロリコンだよね！？

…って、1週間混乱しまくっていたおかげで気付かなかったのだ。

第3王子様っていう存在を、私が知らないことに。

01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。（後書き）

今日は結婚式当日。

エリさんは、花嫁衣装です。

02 王子のことを、教えて下さい。

「……………」

む、無言の沈黙が怖い。突き刺さる視線が痛い。

ちらりとリースンの方を見ると、彼女は眉をひそめながら頭を抱えていました。

その顔にはありありと、

（どうしてくれようかこの人は）

って、書いてあった。くつきりと。

これはきつと、結婚が決まったっていうその時に聞いておくべきことで、お嫁に行く当日に尋ねることじゃない。

ほんとうに、この1週間錯乱しすぎだよ、私。

やがて、ややあつてリースンが口を開いた。

「そう、でしたわね…。考えてみれば、エリ様がこちらにいらしたのは2年前。でしたらアレク様のことをご存じではなくても仕方ありませんわ」

ちなみにリースンは、私が異世界からやってきた、って知ってる数少ない人間の一人。

この世界でそのことを知っているのは、リースンと、それから母様

と父様だけ。

「ですが、そういうことはもう少し早くお気づきになるべきですわ」
「はい、すみません」。14歳っていう衝撃の年齢に思いのほか意識がいつてしまひまして」

私はぺこりと素直に頭を下げる。

全くもって彼女の言う通りだから。

でもさすがに情報皆無状態でお会いするのはどうかと…。

かといって今更ながらなこんなこと、リースン以外に聞けないし…。

って顔をしてたら、勿論リースンはきちんと教えてくれました。

ため息まじりに、だったけど。

「この国には、エリ様がご存じの通り、お2人の王子とお1人の王女様がいらっしゃいます。ですが実はその下にもう1人王子がいるのです。それが第3王子アレク様…エリ様の嫁がれる方ですわ」
「でも、私、知らなかったんですね。それにそんな話も聞いたことがなかったですし」

他の王族の方はもちろん、知っていたんだけど。

だから王族に嫁ぐって聞いた時、てっきりそのどちらかの王子様だと思ってた。

でも考えてみたら2人とも、もう20は超えてるし。

しかも3番目の王子…って、え、誰それ？みたいな結論に至ったの

がついさっきだったという、なんとも残念な私の頭。

「アレク様はエリ様がこの世界に来られた2年前に、他国へ留学なさいましたの。それからこの国には一度も帰られておりませんわ。ですからエリ様をご存じないのも無理はありません」

なるほど、つまり私と入れ違いにここから出て行ったのね。

道理で知らないはずだよ。

それにしても、2年前……っていうことは、12歳かあ。その歳で、他の国に留学だなんて、たいしたものだよ、うん。

私が12歳の頃なんて……小学生でしょう？お兄ちゃんに夏休みの宿題を全部押しつけてたような、ダメダメ生徒の模範のような子供だったよ。

あの時は、まるまる一カ月分の日記を丸投げしてごめんね、お兄ちゃん。

それにしても、この国の王族はみんなそうなのかな？そんな、そんな年齢から留学とか。

そう聞くと、彼女は首を横に振った。

「そんなことはありませんわ。現に留学されたのは、アレク様だけですもの」

聞けばアレク王子、幼い頃から『神童』と呼ばれる程の切れ者で、その実力は王様をはじめとした城の者全員が認めるほど。

もつと彼の才能を伸ばすため、そして更なる知識を増やし、見聞を広めることは、将来国を背負って立つ国王としては必要な事だろう。ということ、満場一致で12歳という年齢ながら他国へやったそう。

「……って、ちょっと待って下さい」

今、あっさりと聞き流せない単語を耳にしたような。

知識習得のため、見聞を広めるため。それは分かった。けれどその後。

将来国を背負って立つ、『国王』

だって、第3王子でしょう？3番目でしょう？後を継ぐのは、こういう時、普通は長男である第1王子なんじゃないの???

「いいえ、この国の王位第1継承権は、アレク様ですわよ？」

聞き間違いであってほしい。そんな私の願いをあっさりと砕くように、リースンはきっぱり言い切った。

私が、なぜ、なんて聞く間もなく、リースンは理由を口にする。

「だって神童ですよ？それに、その歳で、既に国政の一部を担っ

ていたのです。次期国王として、これほど相応しい方はいらっしゃいませんわ」

え　と、……つまり、私の旦那様は未来の王様で、私はそんな方の妻。

それって、私が次期王妃っていうこと、なんでしょうか…？

私の顔に浮かんだ疑問を読み取ったのか、リースンはこくりと頷くと、

「その通りですわ」

そう答えた。

……どうやら私は、年齢差に気を取られ過ぎていて、とても大変な立ち位置に立たされていることを、今更ながら認識致しました。

02 王子のことを、教えて下さい。（後書き）

肝心の王子様が出てくるのは…もう少しだけ、先です。

03 ここまで来たんですから、覚悟を決めましょう私。(前書き)

私の小説を閲覧していただき、ありがとうございます!!

お気に入りも100件を超えたみたいで、嬉しいの一言です!!

本当にありがとうございます!!!

(01を少し変更しました...)

03 ここまで来たんですから、覚悟を決めましょう私。

国王とは、国のトップに君臨するお方。

その妻は、王妃と呼ばれる。

…14歳の次期国王と、異世界出身21歳の未来の王妃。

現国王様は、若くはないし、失礼な話だけでご病気で…なんて今すぐなってもおかしくない。

そうなったらすぐにでもアレク王子が国王になる訳で。

いくら神童、なんて言われてたって、まだ14歳の少年でしょう？
しかも、それを側で支える妻が、この世界のことを、まだあまり理解できてない私。

私の頭に浮かんできたことは、1つ。

大丈夫なのかな、この国。

だけど、私はそんな未来のことを心配している場合ではなかったのです。

がたんがたん、と、道を走る馬車の車輪、そして馬の蹄の音しか聞こえなかった中に。

ざわざわと。

人の声が出した。

それも、お城へ近づくにつれ、その音が大きくなっている。

「？なにか、人がたくさん集まっている気配がしますね」

「当たり前ですわ。だって未来の国王の結婚式ですよ？これは国家の1大イベントですもの。国中から一目見ようと、国民が集まっていますわ」

1大イベント。確かに。

日本でいえば、皇太子の結婚式、みたいなものだよね。

後はイギリスとか他の国でも大々的にやってたっけ。テレビでも、生放送、とかで。

やばい、今自分がその中心にいるかと思うと、途端にドキドキしてきた…！！

だって、私、容姿も普通の平々凡々人間だし、そんな、注目される人生送ってきていないですから！

そんな私の緊張をよそに、ざわめきが大きくなるなか、馬車は静かに止まった。

馬車の扉がゆっくりと開く。

まず目に飛び込んだのは…。

どこまでも続く、真っ赤な長い絨毯。

そして。

割れんばかり、大音量のラッパのファンファーレ。

「未来の王妃、エリ様にご到着されました!!」

そして高らかに宣言される男性の声に合わせて、カーペットの両側に立つ兵士たちが一斉に敬礼をした。ここでひと際大きくなる大歓声。

「うつ…」

き、消えて、しまいたい。なんなの、この大層なお出迎えは。

大袈裟すぎやありませんか!?

私に、あのレッドカーペットを渡れと? 周りが大注目の中?

こんなの、生で見るの初めてだよ。ハリウッドスターがキラキラ笑顔振りまきながら通る、そんなやつだね?

「リースン、私無理」

「何を今更」

「だって、私今日10センチヒールですし!! こけますって!! あんなに人が見てる中それをすると思うと、恥ずかしいじゃないですか!？」

しかもドレスの裾は、恐ろしく長い。私の身長分はありそう。

私の夢は、外国の小さな教会で、慎まやかな結婚式をあげることだったのに。

まあ外国っていうのは、あながち間違ってはいませんが。スケールが大きすぎる。

全然憤まじやかじゃない。むしろ真逆をいつているこの感じ。

私が必死の形相で訴えてみたけれど、侍女は満面の笑みを浮かべてスルー。

手早い手つきでベールを私の頭にかぶせると、

「エリ様。さあ、覚悟を決めて、行きますわよ！」
「きゃあ」

勢いよく後ろを押されて、私の体は外に投げ出された。
うわあ、こけるー！！しかも顔面から……！！？って思っていたら、誰かが私をナイスキャッチ。

「怪我はない？可愛いマドモアゼル」

さらりとそんな台詞を、甘やかな声で言ったのは、第1王子のハーベイ様。

灰色の相貌で私を見つめると、その端正な顔立ちに蕩けるような微笑みを浮かべた。

ああ、眩しくて溶けてしまいそう…。

そんなことを考えていると、王子は私の左手を自分の右手と重ねる。

「！？」

え、なんですか、この状況。なぜに第1王子様が私の手を？

なんて思いながらばかんと王子の顔を見てみると、不意に反対の手を誰かに掬われた。

「え」

今度は何事なの、と思ってそちらを見れば、短く刈り込んだアッシュの髪と瞳を持つ第2王子、マエスト王子が無言で立っていた。

ハーベイ王子と同様、こちらも目元涼やかな、やはり美形。

「エリ様、行こう、アレクがお待ちかねだよ」

私よりも1オクターブ高い声に振り返れば、流れるような亜麻色の髪をウェーブさせた美少女、第1王女マリア様の姿が。

そしてこちらも超が付く程の美少女。

…この世界に来てから思ってたんですが、何気に美形率が高いです。

その中でも王家の血筋は格別で。

王様はもとより、王妃様は若い頃は国一番と謳われる程の美人さんだったそう。

そんな訳で、その血を色濃く受け継いだ王子王女様方は、私のような者が直視するのは畏れ多いほどの美貌の持ち主。

そんな王子2人に両手を取られ、ドレスの裾を王女様とこれまた麗しの侍女リースンに持たれ。

更にもう一度後ろを振り返れば、ひしめくほどの、大勢の観衆の皆

様の姿が。

分かります、ええ、感じますとも!!
皆が私に注目しているのが嫌と言う程!

…ええい、もう、こうなったら行くしかないじゃないですか!!
両隣りに人が付いているんだから、転びそうになっても助け
てくれるだろうし。

私は、2人の王子にエスコートされ、王女と侍女に裾持ちをされ、
大勢の観衆に見守られながら足を一歩、踏み出しました。

03 ここまで来たんですから、覚悟を決めましょう私。(後書き)

いよいよ結婚式が始まります。

04 永遠の愛を、誓ってしまいました…。(前書き)

読んでいただいている皆様、誠にありがとうございます。
ようやく、肝心の王子様がちょびつと、出せました…！

04 永遠の愛を、誓ってしまいました…。

長い長いそのカーペットの先は、お城の大広間につながっていて。

そこには今までいた兵士とお城の侍女たちの代わりに、今度は貴族の皆様がずらりと勢ぞろい。

顔を見たことないような方から、前に視線を向けるにつれ、私でも名前を知っている大貴族の方々が見えました。

さっきまでの喧騒が嘘のように、中はしんと静まり返っていて。

ため息一つこぼせない程の静寂。

その時。

私が入口に立ったのと同時に、元いた世界でもお馴染みのあの音楽が、大音量で鳴り響いた。

広間の隅の方で控えていたらしい、オーケストラの生演奏。

世界は違っても結婚式での入場の音楽は一緒だなんて、なんだか不思議な気がする。

ふっと気付くと、両隣りにいた王子の姿はなくて、代わりに立っていたのは私の父様。

父様は私をじっと見ると、ふわりと優しく微笑んだ。

言葉はなかった。けれどその瞳は言っていた。

（大丈夫、何も心配することはない）

そんなに私、不安そうな顔してたかな???

…うん、してたかも。だって顔も初めて見る相手、しかもその存在をきちんと認識したのもついさっきっていう状態で。

その上相手は7歳年下の次期国王様。

動揺しない方がおかしいと思う。

けれど、その顔を見て私の心は少し軽くなったみたい。

ありがとうございます、父様。私もそんな気持ちを込めて微笑み返した。

礼服、のようなものに身を包んだ父様と私は、その後仲良く腕を組んで参列者たちの間を通り抜ける。

…そういえば、お兄ちゃん言ってたなあ。

俺が父親の代わりに、ウェディングドレスを着たお前と一緒に花道を歩くんだからな！！って。

だけど、ごめんなさい。

それはもう無理みたいです。この世界にはいない兄に、心の中でそっと謝った。

そして。

広間の終着点に立っている、一人の人間。

白いタキシードを着た、金色の髪の毛をした人の姿が、そこにはありました。

「……っ!!」

ベールで視界がぼやけて顔ははっきり見えないけれど。

絶対、絶対あの人だよね、アレク王子って。

だって白い服着てるし！祭壇の前で立って私を待つ人なんて、新郎しかないよね!？

顔が見えそうになった瞬間、私は思わずベールの下で顔をうつむかせる。

14歳、この人が、14歳の王子様…。

見たいような見たくないような、そんな複雑な心境で。

どうせこれから先嫌と言うほど顔を合わせるだろうのに、私はささやかな抵抗を試みる。

さつき不安を軽くしてもらったばかりだけど、やっぱり実際目の前にするとそうもいかないみたい。

心がざわめく私をよそに、ついに父様から王子の手に私がバトンタッチされた。

その手が驚くほど冷たくて。一瞬体をびくりとさせる。

私は王子に手を握られ、目の前の階段を一步、また一步と昇る。

なんだか死刑台に向かう気分…とまでは絶望的なものではないんだけれど。

他の花嫁さんたちと同じ、幸せな気持ち、には程遠いのは確か。

階段の先には祭壇があつて、牧師さん…よろしく、国王様が神妙な面持ちで立っていました。

ゆっくりとフェードアウトしていく音楽。

それと共に再びあの静寂が戻ってきた。

張り詰めた空気に、私は再び緊張していくのを感じる。

やがて、王様が厳かな声で言葉を発した。

「アレク・ガイナ・ブリストル、汝、病める時も健やかなる時も、共に歩み、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、エルミ二王国国王の名のもとに、誓うか？」

「はい、誓います」

隣から発せられた声は、まだ少年の名残を残した、少し甲高い声。

声を聞いて思う。やっぱり彼は、王子はまだ14歳だって、改めて実感させられる。

次は私の番、です。

「エリ・サイレン・シルバーナ、汝、病める時も健やかなる時も、共に歩み、死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに

添うことを、エルミニ王国国王の名のもとに、誓うか？」

…ここで、誓いません、なんて言ったらどうなるんだろうって考えるけど、勿論言いませんよ？
空気はきちんと読めますから。

「はい、誓います」

声が少し裏返ってしまったのは、大目に見てください。

それから次は、指輪の交換。

なぜかサイズがぴったりの銀の指輪。

いつ、どのタイミングで測ったんだろう。あつらえたみたいに、しっくりと指になじむ。

それにしても、王子様、女の私が憎らしくなるくらい、細くて綺麗な指をしてる。色白だし。

私と同じぐらいのサイズなんじゃないんだろうか、これ…。

いくら年下とはいっても、これはかなりへこむかも…。

そんな複雑な思いの中交換タイムも終了し。

最後に。

やっぱり言うべきか結婚式と言えばおなじみの、あれが最後に待ち受けていました。

「それでは、2人、誓いのキスを」

04 永遠の愛を、誓ってしまいました…。（後書き）

結婚式…出たことがないので、こんな感じかな、と思いながら書き
ました。

難しいですね…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6916z/>

私と年下王子サマ

2011年12月27日01時45分発行